

瀧澤 春

表紙イラスト：Zukky

デ
イ
ア
ボ
ロ
ス
な
君

試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ディアボロスな君』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ディアボロスな君

瀧澤 春

表紙 / Zucky

登場人物紹介

Characters

アルテミス

かつて神に謀反を起こし、封印された陽気な女悪魔。自分を解放してくれた少年司祭トリスに恋をし、誘惑をする。実は気高く純真な性格で、いまだ処女である。

トリス・サウス・グローリー

少年司祭でエクソシスト。アルテミスの封印を解く。悪魔であるアルテミスを改心させようとする、真面目な司祭。

墨を流したような漆黒の空。浮かぶ月は朧げ。雲はスモークのように、暗幕空を背景にかすかに滲んでいた。

死んだように眠った街中。ここに人が住み始めて一体どれくらいの月日が経ったのか。石畳の大通りの両端に色の褪せた屋根を持ち、くすんだ煉瓦造りの家が建ちならぶ。

深夜だからなのか。それとも街中を流れる不穏な空気に、本能として危険を無意識に察知でもしたのか。街を歩く人影はおろか、石畳を軽快な車輪音と一緒に踏んで進む馬車の姿もなかった。

だからこそその石畳の大路に立つ人影は怪しいほどに場の雰囲気から浮いていた。

人影の正体は少年。黒髪に、鈍色の瞳を持ったまだあどけなさの残った男の子。

それが赤い十字の染め抜かれた白の法衣——その服は、聖教会の派遣するエクソシストのシンボルだ——に身を包み、愛らしい顔を緊張に強張らせて立っている。

(悪魔の気配だっ)

エクソシストは聖水の詰まった瓶を取り出す。

少年、トリス・サウス・グロリーはこの街に出没するという悪魔退治のために街中を探索していたのだ。このまま今日は何の収穫もなく宿屋に帰ることになりそうだと思った矢先、少年の生来独特の神経が何かをかき取った。トリスは頼りなさそうな印象があるが、彼は聖教会史上最年少で教会司祭に就任し、同時に最年少でA級エクソシストの任命を受

け、その優秀さは折り紙付きだ。実際、これまで浄化した悪魔は数知れない。

「そこかっ！」

肌がこそばゆくなるのを覚えれば、この近くには悪魔が確かにいる。そして少年は地獄の底を思わせる深遠な路地裏に踏み込んだ。しかし。そこには悪魔ではなく、顔をリングのように真つ赤にした男が、少女を今にも襲おうとしているところだった。

「なんだ……うへえ？ カワイイお嬢さんだなあ」

男は酒臭い息を撒きながら、胡乱な眼でトリスを見る。

「ち、違う！ 僕は男だっ」

男はかなり酔っ払っているようだ。少年は、悪魔だと思った自分の勘が外れて拍子抜けしながら、少女を助けようと男を睨む。

「その娘から離れなさい。さもなくば聖教会より与えられた権限により、あなたを逮捕します」

エクソシストには悪魔祓いと共に、現行犯の逮捕権限まで付与されている。

赤ら顔の男は逮捕されてはたまらないと、脱兎の如く逃げ出す。

「ふう……」

少年は男の後ろ姿を見送りながら、少女に駆け寄る。

「大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

7

トリスは少女に駆け寄る。少年と大して歳の変わらない女の子だった。少女は無言で頷き、そうかと思えばいきなり抱きついてきた。

「うわっ……あ、あのちよっとっ……」

それほど怖かったのか。少年の身体にしがみつく女の子の力は、驚くほど強かった。

（う、まだあの感覚……）

こめかみに静電気が駆け抜ける搔痒感は、少年の意識を叩き続ける。

（でも悪魔なんてどこにも……え、まさかっ!!）

しかし気付いた時には遅かった。少女の顔は皮肉と嘲弄の邪悪な色に染まり、トリスを見ていた。

（悪魔の変装に気付かなかったなんて!）

少女の瞳は肉食獣のようにギラギラ輝き、繊細そうな唇からはノコギリのような歯が垣間見えた。

『酔っぱらいを餌にしようと思ったが、こいつあついでるっ』

少女は外見に似合わぬ唖れた声を漏らして、ヒヒヒと嗤う。

『無駄だッ』

少年は聖水を浴びせようとする。しかし悪魔はそれを察知し、トリスの手から聖水を弾く。瓶は落ちて割れて、聖水がぶちまけられてしまった。

『たっぷり可愛がってやるよ、ボーイっ!』

悪魔の剛力に少年はかなわず、組み伏せられてしまう。

「くっ、アアッ……」

骨が軋むほど身体を掴まれ、さらに悪魔に顔を舐められる。いくら優秀な司祭でも、それは悪魔祓いの技術にかけて優秀なのであって、体力勝負では勝てるはずもない。

『さて、眼ん玉からでもほじくってやろうかねえ』

悪魔は、高々と腕を振り上げた——その瞬間。悪魔の振り上げた腕がけたたましい音と共に千切れ飛んだ。

『グガアアアアアア……』

「情けないぞ、トリス」

頭上から降ってきた声に、悪魔と少年司祭は顔を上げた。するとそこには月の光を浴びて、妖艶なシルエットが浮かぶ。

それはかなりの高身長で、色素の薄い髪が腰まで流されている。その装いは露出を抑えるというよりも、グラマーさをさらに尖鋭化するラバー・ビスチェで身体が絞られている。昼は陽を、夜は月を浴びて淫靡に輝く様は容易に想像がつく。

女体を飾るには絶好の素材であるラバー生地と、女の色香をグッと高めるビスチェだけでも生唾ものなのに、その衣の中で息づく肉体は、女性ホルモンで作られられた芸術。

その胸元は大胆に開いているうえ、乳房の上弦そして下弦の乳頭が、見えるか見えないかのギリギリの位置まで添え布は削られていた。立体的に搾りだされる乳房は、海洋に浮かぶ半島を惹起させる。そしてバストサイズは、大人の手でも片方では到底覆えず、両手でやっと用を為すダイナミックさを誇っていた。

秘部を覆う布は極限まで無駄を除かれたタイプ。両サイドは急角度で切り上げられていて、ムッチリと脂ののった太股がつけ根まで丸見え。その上、美肉脚はガーターベルトで吊られた琥珀色のストッキングに化粧され、ただでさえ艶めかしい筋肉をより妖艶に演出していた。

外装生地それ自体が表面張力のごとく極薄だから、歩きたびに美乳が、昂奮した牛が首を荒々しく振るようにたぶつく。かと言って胸から眼を剥がしても決して妖美な魔手からは逃れられない。視線を下に逸らせば、視界にとびこんでくるのは胸に負けず劣らずむっちよりと膨らんだ恥丘。なだらかな腹部を下方へたどっていけば、いきなりそこには高峰が屹立しているのだ。それが歩く振動でグイグイと左右に揺れれば、今にもサイドから牝裂が剥けてもおかしくない。

だが悪魔が眼を睜つたのはそんな完璧なプロポーションに見とれた訳ではない。

その女には悪魔としての特徴がありありと揃っていたのだ。曰く、艶光りする髪の間から生えるのは山羊のように捻れた角、背中から生えているであろう蝙蝠のような漆黒の翼。

「返して貰うぞっ!!」

速攻でリグルルを潰そうとする。しかし立ちはだかる下等悪魔に邪魔されうまいかな
い。

「ええい、邪魔だっ!」

それでも立ちはだかる者には容赦なく爪牙の洗礼を与え、血飛沫の聖水が白み始めた空
にぶちまけられていく。アルテミスも返り血を身体に浴びて、それが紅玉のように光る。
つり上がった瞳に上級悪魔の威光をたたえ、髪はザックリと波を打った。

「おおっと、そこまでだ。アルテミスよォ!」

「アルテ——うウツ!」

トリスの呻きが聞こえれば、アルテミスの縦横無尽に動いていた身体が止まる。少年は
リグルルの手下によって首を締め上げられていた。

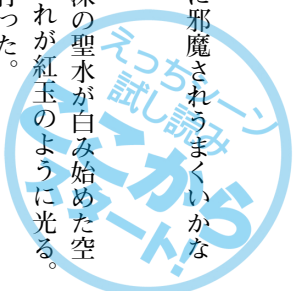
「……、そいつは関係ない。お前らが欲しいのは私だろ!」

「そんなにコイツを助けたいか。だったら俺に奉仕しなっ!!」

「……奉仕っ?」

「分かるだろうが。女が男にすることだよ、ゲへへっ!」

リグルルはズボンの合わせ目から、すっかり充血してそそり勃っている肉棒を取り出す。
竿は太さから長さまでトリスの倍以上あり、悪魔の巨軀に見合った逸物だ。そしてカリ高



な亀頭からは、酸鼻な悪臭が絶えず流れてきた。

(なんて大ききつ……それに臭いもひどいっ)

腰が引けそうなホルモン臭に、アルテミスは眼をしつこく瞬かせた。

「何してやがる、あの小僧を殺してもいいんだぞッ！」

女悪魔は拳を握りしめながら、トリスを助けるためだと、リグールの前に立ち膝をついた。裏切り者に膝を屈する、それがトリスを助けるためだとはいえ、屈辱感ではらわたが今にも煮え立ちそう。

「うげへへ……。いい眺めだぜっ」

立ち膝になることでガーターで吊られたストッキングが伸び、ストッキングの琥珀色と肌の白さが混ざって媚を含んだ色合いとなる。そしてただでさえ引き絞られた肉体がグッと前に迫り出すことで、豚悪魔に双房のせめぎあう深い谷間を見せる格好だ。

(トリスっ……)

アルテミスは横目で人質になっている少年を見ながら、

「……ンふう」

そつと首を伸べて、毒々しい原色の亀頭へ舌を当てた。

(くさいっ！ 鼻がねじ曲がりそうッ……)

それはトリスのものよりもどぎつく、臭いだけにもかかわらず、鼻腔粘膜を震えさせる

ほどにひどい粘着質だった。

「オオオウ。やわらけえ舌だ。さすがはルシファアの女官だけあるぜ」

深い切れ込みから出る先走りは染みだすというより、流れるといった方がいい。リードのような粘り気と、生ゴミのような腐臭が混ざりあって、鼻と口腔の粘膜が灼けそうだ。

「ん……んふ……んく」

掌が焦げそうなほどの肉鋼の熱さ。アルテミス之苦悶を感じ取ったのか、彼女の折りたたまれている翼がかすかに引き攣った。

「おいおい。もうちつとやる気だせつ。俺の汁を飲めッ！」

髪をグツと引っ張られ、美女悪魔は積極的に大粒の先走りを口に含んで嚙下する。きな粉でも頬張っているかのように、先走りによって口腔の水分が吸い取られ、いちいち喉を通すのが難しい。何度もむせ返りそうになった。

「んふ！　ちゅ、ちゅぱつ……ちゅうう！」

鈴口に向けて舌鋒の集中砲火を浴びせれば、腐った卵のようなニオイが口腔へ先走りと共にドツと流れてきた。

「どうだ、うめえだろ。俺のちんぽはっ！」

舌のつけ根がピリピリと痺れ、下顎がズッシリと重たくなる。

「んふっ、ちゅ……」

「すげえぜ、あのアルテミスが小僧一人にここまでするなんてな！」

「ううふええ。早く俺たちも味わいたいぜ」

絶世の美女のフェラ奉仕を目の前に、リグールの手下たちは昂奮に沸いた。

「ナメナメの方は手慣れたるじゃねえかつ……オウオウ、よくなってきたぜッ」

妖艶悪魔は髪をかきあげながら、岩盤のようにゴツゴツしたカリ首に手を添え、そして幹にキスをしていく。

「分からねえな。どうして悪魔のお前が人間ごときにここまでする？」

「ちゆるっ……んふ」

アルテミスはリグールを無視して、舌を動かすことに専念する。すでに巨躯の昂奮は上昇の一步をたどり、白く濁った先走りが肉茎全体を淡くコーティングし始めていた。

（ああ、気持ち悪い……。この私が、クソ……。こんな下等ごときに！）

まるで鉄球でも入っているかと思えるほどに大きく、堅固な陰囊。それを口に含めば、鼻頭をリグールの陰毛がくすぐり、悪魔の不快感を増幅した。玉の表面で舌をチロチロ動かし、竿を先端部に向かって、唾液で飾り、そしてまた龟头に戻る。

「んちゅ……ん！ んはっ……」

「ッ!!？」

アルテミスは、突然唇めがけて突きだされた肉槌の一撃に唇を離した。

乳首をラバー地ごしに擦られ、乳脂肪を燃料にして火花が弾けたかと思えば。

ビリーイイイッ!

突如、けたたましい音が周囲に響き渡る。それは風船が割れるというより、引きちぎられて破裂するという音だった。

「はううううっ……!?!」

翼の敏感な皮膜をカリで思いつきり引つ搔かれ、強烈な快感の前に女悪魔は身体を仰け反らせた、その瞬間――。ハイポリュームの乳肉がブルルンと上下に大きく振り回され、その動きの荒々しさに、遂に胸を支えていたカップが壊れてしまったのだ。

（ああああ……私の胸がっ!）

大理石のような白肌とのコントラストで、妖艶さを高めていた黒の生地が引き裂かれ、果汁たっぷりの桃肉のような乳房が飛び出す。

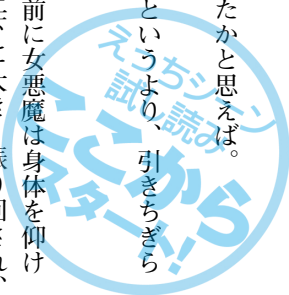
その瞬間胸当てによって抑えられていた柔肉のニオイが一気に外界へと爆ぜる。

それは麝香じやくかうのもつ濃密な官能と、ミルクのような甘ったるさを併せ持った驚異的な媚臭だった。

「コイツあ、最高の生乳だあっ!」

「ケケケ、いっちょまえに小僧も、おっぱいに釘付けだぜっ」

悪魔どもが好色に騒ぐ。



「ふわあ……!! だめえ、トリスッ、みないで!」

確かな少年の視線を感じて、思わずこぼれた悪魔らしからぬ羞じらいの嬌声。顔が羞恥に燃え上がり、それまで隙のなかった二重瞼の氷の美貌が強色づく。

「トリス……!」

生乳を手ブラで隠し、身を縮こませる女悪魔。

(どうして私がこんなことを……)

猛烈な羞恥心が嵐の海流のようにうねりながらなだれ込んでくる。こんな想いはルシファアの前でしか覚えたことがないはずのものだ。

「馬鹿野郎っ。胸を隠すなっ。リグール様にお見せするんだよ!!」

グツと後ろに回り込んだ五匹目の悪魔は嗤い混じりに言いながら、アルテミスの尻尾をグイッと引つ張った。

「キイイイイイイイ……ッ!!」

美麗な悪魔は金属的な叫びをあげるが早いか、尻尾と連動して乳首そして布ごしのニップルが熱く燃え上がるのを感じた。

「だめえええ、尻尾おはっ、ヒッヒッヒイイイイイ!!」

悪魔にとって翼、角そして尻尾は性感帯同然だ。それぞれに神経が過密に詰まっていて、脆弱な皮膚にくるまれてる。だから少しの接触だけで身体に異常な感覚が押し寄せるの

だ。だからこそ翼、角、尾は隠すことが可能なのだ。

「おおおう！ オウオウオウウウ〜〜〜！」

尻尾が乱暴に引つ張られるたび、臀部からオレンジ色の電光が迸り、脳天まで駆け上がってくる。理性がショート寸前にまで追い込まれてしまえば、目の前が真っ赤に灼け爛れ、心が沸騰する。

「ひいぐつ、ああぐ……はなへえつ！ うむ……はなひいつてえええ……つ！ アアアア、イクウウウ!!」

プシャアアアアアアッ！

ラバー生地の切れ込み角度の強いサイドから、岩礁にぶつかって壊れる波のように恥潮が漏れ噴いた。ラバーの股間部はまるでクジラの体表のように妖しく体液分泌で黒光りし、琥珀のストッキングはぐつちよりと黒く塗れてやらしく淫光を放つ。

「こりや面白いッ。じゃじゃ馬が尻尾握られて潮噴いたゼッ！」

「はなひいつてえええ、だどよっ！」

ゲハゲハと下級悪魔どもは、でっぷりと脂肪の詰まったビール腹をパンパンと叩いて嗤いさざめく。

(クソクソクソクソオオオ……!!)

アルテミスは悔しさに唇を噛みしめた。

「おい、お前ら。そこまでにしろ。お前らを待つてると日が暮れちまうぜっ！」

「え、でもまだ俺たち……」

「うるせえッ！」

リグールの一喝に、遊んでいた下級悪魔たちは震え上がってアルテミスから離れる。女悪魔の奔放な肉体は悪魔たちの先走り液でいやらしく飾られていた。

「さて、いよいよ本番にいくぜ。アルテミスッ！」

ゴツゴツしたリグールの指が、愛液で秘部に密着した股布を横にずらす。すると、まるで珊瑚のような初々しいピンクのラビアが、裏切り者を迎え出た。

「ウウッ……」

身体の部位でもっと生々しいところを鑑賞され、女悪魔は美貌をキツク歪める。逃げようとしても尻尾で味わわされてしまった絶頂感で身体は鉛のように重い。その上リグールに抱きしめられては、抵抗らしい抵抗などできるはずがない。

「アッ……！」

対面座位の体勢。処女肉に鋼のように硬く、男の欲望ここに極まれりとはかりに熱く、たぎる男根が押し当てられる。女悪魔の足指が反射的にキュツと丸まった。

「や、やめえ……はぐうっ！ くわあああ……い、痛いいいい!!」

思わず裏切り者の前で漏らしてしまった生娘の生々しい悲鳴。悲鳴が終わるか終わらな

いうちに、声をあげさせられてしまった怒りで顔が真っ赤になる。

「かわいい声じゃねえか、アルテミスう。ゲハゲハゲハアアッ！」

肉先が秘裂に少し接触しただけで、身体が真っ二つに割られるような破碎感が心臓を射ぬく。

「い、ひいー……ひー……」

「汁でべちよべちよな割りに痛がるなあ……オイ、まさか……処女なのか？」

『痛い』——アルテミスは取り返しをつかない失言をしてしまったことを悟る。

「こいつはいいっ！ さすがはそこら辺の悪魔どもとは違うな。未だに処女だとはなッ。ルシファーはかなり奥手なのか、ヒーッヒッヒッ！」

思慕していたルシファーを馬鹿にされ、アルテミスはリグールを睨めつける。しかし今の状態ではそれ以外どうすることもできない。

「なんだその顔は生意気だぜ、アルテミスっ！」

抱きしめられたままの体勢で、リグールはいきなり腰を持ち上げてきた。再び瞳孔に肉剣の切っ先が当たる。

「ッ!! 身体あ、裂ける……あむむむむッ」

身体は自然と伸び上がり、肉巨木から逃れようとする。しかしリグールの豪腕に背骨が軋むぐらい力強く抱き寄せられた現状では、どんなことをしても逃れる術はない。

「へへへ、いやがってるフリしやがって。おおう、デカパイの乳首が気持ちいいぜっ」
 コリッ！ コリッ！ グミのような歯ごたえを予期させる弾力感が、心地よく胸にしみてきて、リグールは満足そうに唸った。

「うむっ……うう、ウウ！」

リグールの鉄板のように逞しい胸板。そこでアルテミスの双美乳が押しつぶされれば、乳首を通して、快美感が乱暴に母性を平手打ちする。

（アアア、胸が……乳首い、熱いいっ……ああ、身体が痺れてくるう……）

リグールが少し動いただけでも節操なしにたわむ乳肉。

「クク、感じるのだろう。乳首が気持ちいいのだろう。素直になれば、ちつとは優しく処女膜を裂いてやるぜ？」

リグールのヤニ臭い吐息が——悪夢の音が、耳へ水銀の重たさを孕みながら入り込んでくる。今はもう乳首が火がついたかと思うほどに熱かった。どんなことをされても感じるものかと我を張っても無駄になる。疼きの炎を内包し、生来感じやすい身体はあえなく快楽に抵抗できなくなり、やがては歓喜する犬のように無意識のうちに尻尾が左右に揺れた。「リグール様、こいつの尻尾、うれしそうに揺れてますぜっ」

「ひいつ、あつ、さ、触るな……ヒムっ!!」

絶頂の高みを見せられた尻尾嬲りを再開されるのではないかという狂おしさに、アルテ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>